

かがやく明日のために

With You

NAGANO

私たちは、長野市男女共同参画情報紙「With You」の編集委員です。3、7、11月号で「男女共同参画」に関する情報を発信しています。



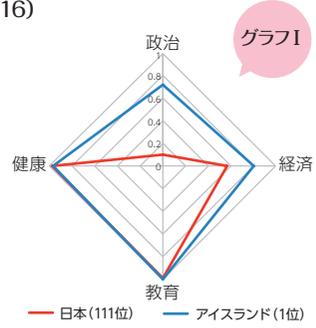
“女性活躍推進”の時代に

なぜ今、女性活躍なの？仕事も家事も子育ても頑張っているのに...と思う女性も少なくないのでは。そこで、今回は『女性活躍』について特集します。

「決定権」を持たない日本の女性
昨年、世界経済フォーラムが発表した、各国の男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数(GGI)によると、日本の順位は世界144カ国中111位でした。この指数は、政治・経済・教育・保健の四分野で構成されており、日本は政治・経済分野での男女格差が大きく、非正規雇用者の割合が多く、また管理職が少ない日本の女性(グラフⅡ、Ⅲ)。男女が共に多様な生き方・働き方を選択し、仕事も私生活も充実した人生を送ることができ、新しい社会の仕組みをつくる上で、女性の活躍が期待されています。

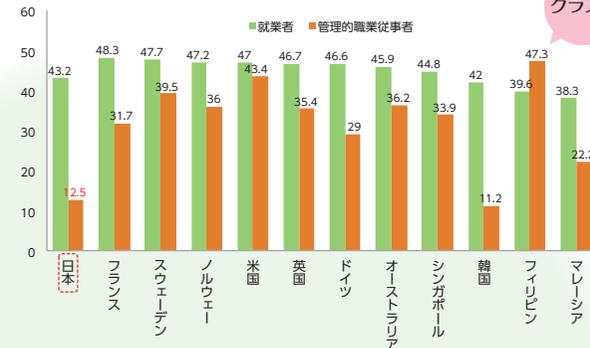
ジェンダーギャップ指数(2016) 各分野の日本の順位

分野	指数	順位
政治	0.103	103位
経済	0.569	118位
教育	0.990	76位
健康	0.979	40位
総合	0.660	111位



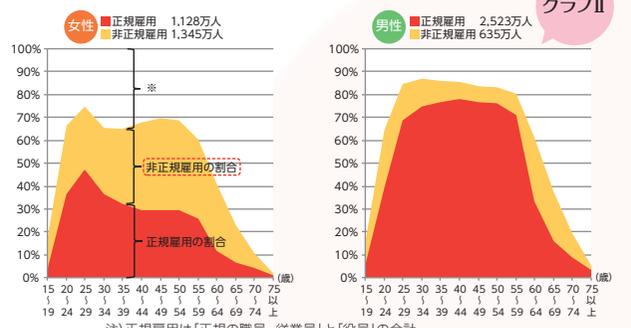
※指数は、女性/男性で算出。0に近いほど男女格差が大きく、1に近いほど男女格差が小さいことを示しています
世界経済フォーラムHPより作成

就業者及び管理的職業従事者に占める女性の割合(国際比較)



平成28年版 男女共同参画白書

年齢別正規、非正規雇用者割合(男女)平成27年



注)正規雇用は「正規の職員・従業員」と「役員」の合計。
※自営業主、家族従業者、完全失業者のほか、学生や専業主婦を含む
総務省「労働力調査」より作成

女性の職業生活における活躍の推進に関する法律(女性活躍推進法) 平成27年9月公布
女性活躍推進に向けた数値目標を盛り込んだ行動計画の策定・公表等が事業主(国や地方公共団体、民間企業等*)に義務付けられました。詳しくはHPをご覧ください。 [女性活躍推進法](#) [内閣府](#) [検索](#)

※常時雇用する労働者が300人以下の民間企業は努力義務

《基本方針の概要》 正規雇用、非正規雇用、自営業等雇用形態に関わらず、自らの希望により働こうとする全ての女性を対象とする。

- ◇仕事と家庭の両立に必要な環境整備
- ◇男性の意識改革
- ◇男性の家庭生活への参画の強力な促進
- ◇育児・介護等をしながら当たり前にキャリア形成できる仕組みの構築
- ◇女性の積極的採用・育成・登用への取組み
- ◇ハラスメントの無い職場の実現 等

今、活躍中の「女性管理職」先駆者に訊く!

信濃毎日新聞社編集局長次長兼文化部長
井上裕子(のりこ)さん

目の前のできることを精一杯やってきた
男女雇用機会均等法が施行された年に入社し、これ30年になります。わずしか女性を採用されない時代で、女性記者を育成するプログラムも無く、属人的な対応でした。上司だった方々に深く理解があったこと、いわゆるママハブということが全く無くて、それは会社として誇れることかと思えます。今は、子育てと両立しやすい制度も整い、出産して復帰する女性記者がたくさんいます。男性も育児を取っています。

子育ては、私の自立でもある

長男が大学生、長女は高校生です。一年間ずつ育児を取りました。一人目の時は、保育サービスも充実していなかった。保育園が終わる夕方から預かってくれる人を募集するチラシを自分で作りました。偶然巡り会った元社員のお宅で預かっていただき、夜の取材を終えて、九時に子どもを迎えに行くと寝るという生活でした。息子が二歳になる年に、わりと自分で計画が立てられる文化部に異動しました。私は、小さい頃から親に自立するよう言われて育ち、働く、気持ちが強かったのと、女性の自立が一つの大きな



井上裕子さん

人生のテーマで、出産で仕事を辞める選択肢はありませんでした。もう続かないと思う時はたくさんありました。

この仕事が大好き

入社五年目の20代の頃に、留学する制度を会社に作ってもらい、一年間アメリカの大学院に行き新聞社のインターンを経験しました。前例はつくっていません。この一年があつて、この仕事を好きだと思つた。自分がいかにマイノリティ少数派だという経験をしたこと、も人生の中で大きかったと思います。

メッセージ<働き女子へ>

- ◇前例と時間は自分でつくるもの!
- ◇100%は求めない。仕事60%+家庭60%=120%!中身ややり方で勝負
- ◇「お願いします」と「ありがとう」を言う人に!
- ◇続けていけばいいことあるよ!きっと

結果は出さなきゃいけないと思つて30代の頃は苦しかったですね。子どもを抱えて夜中にPCを打ったり、原稿が書けなくて半そをかいていたことは山のようにありました。だけど、友だちから「本当に辞めなくちゃいけない時があるからその時まで頑張りなさい」と励まされ、今この仕事を手放したら二度と戻れないと思つてきました。時間が100%自由に使えない中で、最大限やるしかない訳です。
でも、子どもが生まれたことは財産になったと思つています。当時まだ虐待という言葉が一般的でなかった時代に、お恥かしい話ですが、自分の子どもが言うことを聞かず叩きたくなる程の気持ちになった時に「ああこういことだと気付いて、虐待の取材を始め、シリーズになり、本にもしました。この取材をきっかけに子育てフォーラムを企画し、訪ねた県立こども病院で見た小さな命が救われていくNCCU(新生児集中治療室)の現場を取材したいと思つきました。そして、娘が三歳になった年に、ルポ(※)「子守歌をう

※'03-'04年くらいで連載した県立こども病院のルポ「子守歌をうたいたい」で'04年ファイザー医学記事賞大賞受賞

元上司のコメント
“自分から言い出したことは苦勞ではなく生きがいになる”という私の経験から、井上さんが思いっきりできるよう、雑事は私や周囲が引き受けました。